

## 日ロ友好愛知の会「第2回 ロシアサロン」

8月11日、名古屋国鉄会館にて、日ロ友好愛知の会「第2回 ロシアサロン“シベリア”」の講演会が行われました。

講師は、第二次大戦で従軍されシベリア抑留体験を持つ日比野藤雄さんと横山周導さんの2人。ここでは紙面の都合上、ウラジオストクの南のポシェット地区で武装解除されコムソモリスカヤで2年間の抑留生活を送った横山周導さん(岐阜県揖斐川町・勝善寺住職、ロシアとの友好親善をすすめる会代表)のお話をご紹介します。



## シベリア抑留とシベリア出兵

# 平和を願い、謝罪と慰霊の訪問を重ねて30年

**横山 周導**(岐阜県揖斐川町・勝善寺住職、  
ロシアとの友好親善をすすめる会代表)

シベリア抑留中に死没した方々の墓参の旅を通して体験したことをお話しさせていただきます。

私は昭和19年(1944年)10月に軍隊に入りました。20年の8月まではごく普通の軍隊教育を受けておったのですが、8月9日のソ連軍の参戦と同時に非常召集を受け、そして8月24日まで戦争をしました。24日まで終戦のことは聞かされなかったのです。場所は満州国境です。ウラジオストクの南にあるポシェット地区の西にコンチンという開拓村があって、その部隊にいました。コンチンには岐阜県郡上郡の人たちが入植していました。

### いじめが横行するきつい軍隊生活

日本の軍隊(陸軍)は大変きつい教育をする。古年兵のいじめとか制裁が随分とありました。何せ軍隊で持つ物には全部「菊の御紋」(天皇の紋章)がついています。これが口実になる。演習中には雪や雨をかぶります。あとで剣先が少しでも錆びついていたら手入れがなっていると殴られる。冬はマイナス30度の世界ですからペチカを焚く。ペチカの前で当番に立っているとどうしても眠くなる。居眠りでもしようものなら、持っている銃を上げ下げする『捧げ銃』を当番の間中ずっとやらされる。「上官の命令は朕の命令」ですから、反論は許されない。わずか1年足らずの軍隊生活ですが、そんな体験をしました。

それで、8月9日に非常召集を受けて、私たちはゲリラ戦をやったから、8月15日の『詔勅』は知らずにおりました。国境を越えて入ってくるソ連軍をポシェットのところで迎え撃つわけです。ソ連=ロシアが入ってきたと言いますが、

敵軍のトラックは全部アメリカ製でした(第2次大戦ではアメリカがソ連軍に大量の物資援助を行った)。

### コムソモリスクで抑留、バム鉄道建設2年間

8月24日に停戦命令を受けて武装解除され、それから1カ月くらいは野営して、国に帰るのを持っていた。迎えが来たと言うので、ポシェットから貨車に乗せられました。中はもう寝場所がないくらいのぎゅう詰め、おそらく3日以上もかかってハバロフスクの東のコムソモリスクに連れて行かれました。ここはアムール川のほとりですから「こんなところから船で帰るのか」と言っていたら、そうではなかった。鉄条網で囲まれた強制収容所に入れられました。部隊長から「3年か5年かわからんが、ここで暮らすしかない。絶対に早まったことはするな」と告げられて、みんな怒ったり消沈したり大騒ぎですが何ともしようがない。

抑留生活に入ったとき、私は21歳になったばかりでした。コムソモリスクでバム鉄道(第2シベリア鉄道)の建設に2年間従事しました。私の場合、運よく比較的早く帰れたほうです。

抑留生活では3つの苦しみがありました。一つは寒さ。マイナス30度、40度の世界では、朝歩くとまつ毛が凍るのです。鼻、耳、指先は常に凍傷の危険がある。二つ目は飢えです。食事が足りない。ヒエやキビの粥、牛か馬のような食事でした。これで大木を切ったり、トラックに積んだりするわけですから、寒さの中で非常に過酷な労働でした。三番目は労働のノルマです。達成しないとパンが十分にもらえない。達成度によってパン1日250gとか300gとかあるのですが、最高は450g。これを達成するのは大変なことでした。それでも日本人たちは労働作業の工程を分割して見せかけのノ

ルマを増やしたり、実質作業量を減らしたりして、うまく立ち回っていました。

### シベリア出兵、日本人に知らされなかった真実

2年で国に帰ったわけですが、そのあとは学校の教師をしていました。シベリアへの墓参りを始めたのは38年たった1985年からです。斎藤六郎さんが会長をされていた全国抑留者補償協議会(全抑協)に参加して、初めてハバロフスクへ墓参りに行きました。ハバロフスクには200人ほどの死没者の墓がある。そこで僧侶としてのお勤めをさせていただきました。それから毎年のように全抑協の墓参りの旅に参加しました。当時は未確認の墓所が多く、抑留者の墓を探して回る旅でもありました。

斎藤六郎さんが1991年にアムール州のブラゴベシェンスク近く、イワノフカという村を訪ねたときのことです。「この辺に日本人の墓はないか」と問うと、村長が「日本人の墓など知らぬ。あなた方はこの村のことを知って来たのか？」と大変な剣幕です。「村の裏に建っている石碑を見ればわかる」と言うので見てみると、「1919年3月22日、この村で日本兵が300人以上の村民を虐殺した。そのうち36人は生きのまま小屋に押し込められて焼き殺された。この恨みは永遠に忘れない。」と書いてある。斎藤さんはびっくりして、「このような事実を知らずに来て申し訳なかった。シベリア出兵の真実を日本政府が国民にちゃんと知らせたことなかつたことも問題だ。」と、なんとかイワノフカ村の人たちと仲直りをするために4年がかりで話し合っ、日ロ共同の石碑を建てたわけです。高さ8mの石碑です。

### 日ロ共同で建てた『懺悔の碑』

石碑の頂上にはロシア式の十字架を立て、日本人がシベリア出兵で村を焼き多くの人を殺害したことへの懺悔、さらにソ連が戦後日本人60万人を抑留しうち6万人を死亡させたことへの懺悔、この両方を書いた。『懺悔の碑』ができて、日ロ共同で追悼式を行ったのは1995年7月のことです。ところが斎藤会長はこの年の11月に亡くなってしまわれた。7月の追悼式でお勤めをした縁で、私が斎藤会長の後を引き継いで、その後毎年謝罪と慰霊の旅を続けてきたわけです。シベリア出兵の際の日本軍兵士の残虐行為に対するロシア人の反感を知り、日本人として恥じると同時に、将来日本とロシアが仲良くするためには、どうしてもこの謝罪と慰霊の旅を続けなければならないと思いました。それから何年か経って、村長が「今では日本人に対する恨みは全くない」と言ってくれるようになりました。

イワノフカ村の隣のタンボフカ村にはロシア人が建てたロシア式の墓ですが、16人の日本人の墓があります。アムール州内には約20の日本人抑留者の墓地があり、州平和委員会のワシリー議長(3年前に逝去)がその整備に尽力して



講演する横山周導さん、  
左は日比野藤雄さん

くれました。まだ半分ほどしかお参りできていないのですが、どの墓もきれいに整備されていて、訪れるたびに現地の人たちが交流会を開いてくれます。今年も8月22日からハバロフスクとイワノフカ村を中心に約10カ所のお墓参りをしてくる予定です。

来年はシベリア出兵から100周年。私はもうすぐ93歳です。来年が最後になるかもしれません。100年目の鎮魂祭を是非イワノフカ村でやりたい、できれば30名以上の参加者を募ってロシアを訪れたいと思っています。

### 命あるものは皆同志なのです

私の体験を聞いていただいて、やはり自分の立場、立脚点をはっきりさせなければならないと思います。イワノフカ村のウス村長を何年か前に日本に招待したことがあります。その時、村長はこう言いました。

「この地球上で命あるものは皆同志です。」

皆が太陽の恵みを受け、同じ水と空気を共有している。あなたが飲んだ水は巡り巡って私が飲む水になり、あなたが吸って吐いた空気は私が吸い次の人に渡す。だからこそ、戦争をやってはならないのです。戦争をやれば地球が潰れてしまう時代です。何年かかっても話し合いで平和を求めなければならない。武器は持たない。使ってはならない。命あるものは皆同志なのです。

このことを肝に銘じたいと思います。

(当日の講演メモをもとに文章化しました。文責はすべて編集部にあります。)

\* \* \*

なお、元海軍通信兵で北千島・幌筈(パラムシル)島と占守(シムシユ)島で米軍電波の傍受・解読の諜報活動に従事し、敗戦後マガダンで4年間の抑留生活を送った日比野藤雄さんからは、外国電波の傍受を通じて戦況の悪化と日本の敗北は海軍ではよくわかっていたこと、しかし、1945年8月15日の玉音放送は陸軍には伝わっておらず、8月17日から占守島に上陸してきたソ連軍と日本軍(陸軍第11連隊)との間で激しい戦闘が行われ多数の死傷者を出したこと(同21日に中央からの指令でようやく戦闘終結)、その後のマガダンでの零下30度の世界での抑留生活などが詳しく話されました。